

## 優秀賞

「星を継ぐもの」 J・P・ホーガン（東京創元社）

情報メディア学科 吉澤亨紀

SF、と聞くとスターウォーズやインディペンデンス・デイのようなビームやミサイルを撃ち合ったり、ライトセーバーを振り回しながら宇宙を駆け回るような作品を思い浮かべる方が多いのではないだろうか？

だが、この作品は一味違う。

時は未来。

人類は遠い木星にまで有人探索を行えるほどの科学力を手に入れていた。そして地球全域を包み込む科学技術のグローバリズムの普及により、ついに争いの無い平和世界を実現させるにまで至っていたのだ。

そんな時だ。

ある月面調査隊が真紅の宇宙服を着た遺骸を発見した。

だが“彼”の身元は地球には無く、そればかりか死後 5 万年を経過しているという人類史上最大の事実が判明する。

彼は何者で、一体どこから来たのか。

主人公ハントはその奇抜な発想と明晰な頭脳で知的に物語を展開していく。

この作品は SF であることは間違いない。

だが私は同時に推理小説としての側面も色濃く併せ持っていると考えている。

最新の科学技術を用いて、従来の推理に新時代の嗜好を振りかける推理 SF。

自分自身が、まるで名探偵か科学者にでもなったかのような気分で読み進めることができた作品だった。

男の子なら、一度は夢見ただろう未知なる世界の発見・遭遇。

そういった沸き立つ少年の心を思い出させてくれる冒険小説であり、ワイン片手に優雅な書齋で「ワトソン君」とどこへともなく語りかけてしまいたくなるような大人の嗜みとしての側面をも持ちうる作品。

全ての伏線が回収される瞬間の興奮と言ったら、ハイスピードアクション映画に勝るとも劣らないものであると断言できる。

著者ホーガンはこう語っている。

人類の理性は常に昨日よりは今日、今日よりは明日を良くしようとする、と。彼の夢見る美しく理的な未知との遭遇を実現するための第一歩として、たまにはこんな優しく穏やかな SF 作品を読むのも悪くないかと私は思う。